

#### ▼編集後記

あまりに大きな災害を前に、私たちは呆然としています。想像を絶する巨大地震と津波。無防備で、危機管理能力のない電力会社と政府。進まぬ救援。届かぬ物資。堪え忍び、流浪する被災者。計画停電。パニック。突然人類の歴史が動いたこの瞬間に、何かをしたいのに、何もできない自分を不甲斐なく思います。歴史学者とはなんと無力なのでしょう。

しかし、私たちはもつと歴史から学ぶことができたのではないかという後悔もあります。今から言えば、スリーマイル島やチェルノブイリの原発事故も、スマトラ島沖地震による津波も他人事ではなかったのです。貞観地震は遠い昔のできごとではなかったのです。人間の営み次第で、天災はさらに大きな人災になるのです。今すぐというわけでもないにしても、歴史学が人類に役立つという可能性を信じることにしましょう。本号では、近世から現代まで幅広い時代を扱う論文、シンポジウム報告、書評を掲載することができました。ここから、新しい何かが生まれますように。(羽漫)

『ゲシヒテ』第四号をお届けします。

今号では、二〇一〇年九月に行われたドイツ現代史学会でのシンポジウム「ドイツ史のなかの『六八年』」の成果報告を掲載しております。今や「六八年」も、完全に歴史学の考察対象に組み入れられたと言えるでしょう。

一〇年ほど前、私が修士課程の大学院生だったころのこと。同じドイツ現代史学会においてフロアの若手参加者に発言が求められ、その一人が「戦後期(第二次世界大戦以降)はまだ歴史学の対象になりえないのでは」という趣旨の発言をなさっていたことを、なぜか鮮明に記憶しています。ご存じのとおり、その後まもなく「戦後史」が急速に盛り上がりを見せるようになり、ドイツではすでに「一九八九/九〇年」さえも歴史家の仕事の射程に入ります。今号の編集実務をこなしながら、あらためて「隔世の感」という言葉を肌身で実感しました。(HM)

#### ▼編集委員

服部 伸(同志社大学)  
高橋秀寿(立命館大学)  
中野智世(京都産業大学)

#### ▼編集実務

村上宏昭(関西大学非常勤講師)

## ゲシヒテ

### 第4号

2011年3月31日発行

#### ▼編集発行

ドイツ現代史研究会(代表・川越 修)  
〒602-8580

京都市上京区今出川通烏丸東入  
同志社大学文学部 服部伸研究室内

#### ▼印刷

株式会社オーエム